

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

3

2018

特集 1を100に変えた連携力



1を100に変えた連携力

緊急報告!

3 和牛日本一を手に「チーム鹿児島」の悲願

佐々木 幸良

年月を掛け心血注ぎ開発してきた地域ブランド『鹿児島黒牛』が和牛品評会で総合優勝を果たした。「和牛日本一」を掲げ海外開拓を狙う「チーム鹿児島」のブランド戦略

7 海外市場の要求はオールジャパン農産物

坂井 紳一郎

海外市場拡大のためには一地域の利益のみを考えるのではなく、協調による日本産品全体の市場拡大が重要と、貿易コンサルタントは説く

誌上戦略会議

11 みんなで考える 「フードバレーとかち」の活力。 産業成長化にむかう地域農業の未来像

官民挙げたプロジェクト「フードバレーとかち」が効果を上げている。産・官に気鋭のジャーナリストを加え、成長産業化する地域農業の未来像を展望してもらおう

情報戦略レポート

15 茶が4年ぶり増収増益 畜産は経営規模拡大が必須

—2016年 農業経営動向分析—

経営紹介

経営紹介

23 有限会社旭養鶏舎／島根県 竹下 靖洋

こだわりの飼料を与え健康に育てた鶏の卵を生産者組合設立のスケールメリットを活かして販売。今後はGAP認証を取得し地産外消の実現を目指すという

変革は人にあり

27 株式会社イグナルファーム／宮城県 阿部 聡

東日本大震災で多くを失った若き農業者が、被災地で新たな農業を始動すべく起業した。就農者を育て、いずれは海外生産をしたいと、展望を語る

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。



撮影：鎌形 久
新潟県五泉市
2007年4月撮影

春陽のチューリップ

■昭和初期から球根栽培が始まった五泉市は、県内でも有数のチューリップ産地。果本地区のチューリップ畑では150万本もの花が色とりどりに咲き誇る■

シリーズ・その他

観天望気

メッセージのある農産物 平田 昌弘 2

農と食の邂逅

平山 亜美／大分県

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

ソウルフードの風景 William H. Coaldrake 22

主張・多論百出

LIENS株式会社

亀山 初美 25

耳よりな話 191回

ヒツジに挑んだ秩父の営農者たち

加茂 幹男 30

まちづくりむらづくり

滞在型市民農園クライנגアルテン

地域住民が交流する田舎親戚制度

四賀むらづくり株式会社／長野県松本市

金井 保志 31

書評

古沢 広祐 著

『食べるってどんなこと? あなたと考えたい命のつながりあい』

宇根 豊 34

認定農業者の皆さまへ 35

インフォメーション

畜産経営の環境や課題に活発な意見 奈良支店 36

テーマ別の分科会が参加者にも好評 福井支店 36

よなよなエールの組織変革に学ぶ 前橋支店 36

農産物物流の講演会が盛況 大分支店 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第13回アグリフードEXPO東京2018 38

4月号予告

特集は「平成生まれの若者と農林漁業」を予定。

「20代、高齢者より出不精」「モノを買わない世代」など、メディアに象徴的に語られる平成生まれの若者たち。新しい時代へ、消費、生産、情報の側面から若者を追う。

望天 観気

メッセーjのある農産物

日本に帰国する途中、トランジットで立ち寄ったドイツ。朝霧に包まれる中、近郊の農家が自ら農産物を教会脇にある広場に持ってきて、朝市の支度をしていた。朝採れたばかりの野菜、肉、チーズ、パン、ハチミツ、ワイン、卵、ジャム、パスタ、花卉かきに至るまで、多分野の生産農家が集まっている。市民は買い物籠を片手に露店を回り、生活の用を足していく。小腹がすいたら、農家が販売トレーラーで提供するハムやワインを楽しむ。ドイツの朝市は、単なる地域産物の露天市ではなく、市民の憩いの場ともなっている。

朝市で並べられている地元産のチーズは、大型スーパーで販売される輸入チーズに比べて割高である。チーズを売る農家の青年が言う。「われわれは外国産の安価なチーズと競争しているのではない、共存しているのだ。安いチーズを買うお客は買ったらい。○人に一人でも私たちのチーズに価値を認めてくれたら、私たちも十分にやっていける」と。ドイツとて、国際化の中で地元の農家が生き残っていくのは大変だ。だからこそ、農家が市場に出て、自らの生産物を説明することが必要なのだ」とも。消費者に農産物の素性を語り、消費者が生産物への安心感と価値観を得たならば、どのような農産物が市場に並ぼうが、確実に素性の分かった農産物を消費者は買おうとする。そんな生産者と消費者との関係性が構築されれば、国際化が進んでも地元の農産物は支持され、地元の農家は地元の消費者に支えられて生き残っていくであろう。

農家の青年が「野草を十分に食べた放牧牛から搾った生乳を利用しているので、チーズからハーブの香りがする」と、主婦に語り掛けている。主婦は、チーズを持ち帰って家族に伝え、それがつくられた物語を家族と共有することだろう。チーズが人と人とを結び、チーズを囲んで豊かさが創られていく。ここに、生産者への信頼感、自分の食べる物への絶大な安心感、生産者と消費者の連帯感が生まれる。これらの根源には、生産者が市場に出て、消費者に自らの生産物を伝えることにある。いかにチーズなどの農産物に情報を乗せるか。ドイツの朝市は、私たちに国際化の中で生き抜く秘訣ひけつを教えてくれている。



帯広畜産大学 准教授

平田 昌弘

ひらた まさひろ

1967年福井県生まれ。91年東北大学農学部卒業。98年京都大学大学院農学研究科博士課程修了。国際乾燥地農業研究センター（在シリア）研究員、日本学術振興会特別研究員を経て、2004年より現職。ユーラシア大陸の牧畜と乳文化を一貫して追究する。主な著書に『ユーラシア乳文化論』（2013年、岩波書店）、『人とミルクの1万年』（2014年、岩波書店）、『デーリマンのご馳走』（2017年、デーリマン社）など。

安定した生産と収入を熟慮し
レタスの水耕栽培を選択する
生産者の想いを消費者に伝え
将来は、輸出プランも：
それって、かつこいいね！！

農と食
の邂逅

平山 亜美 さん

大分県国東市

ウーマンメイク株式会社

代表取締役社長

非農家出身の二〇歳代女性が三年前、一億円を
超える投資をして水耕栽培でレタス生産を始
めた。就農のきっかけは生産と消費の交流す
る道の駅構想に関わったこと。役員、パートを
含む全員が女性の株式会社「ウーマンメイク」。





P19:大阪府枚方市出身。大分県別府市の立命館アジア太平洋大学および、韓国の慶熙大学卒業 P20:施設栽培の強みは周年出荷ができる点、販売価格が安定している点だと言う(右上) 1日当たりおよそ2,500個のレタスを出荷。2期目(2017~18年)には6,000万円の売上高を見込んでいる(右下右) これだけまとまったハウスが建っているところは周辺になく、遠くからもかなり目立つ(右下左) 娘の心亜ちゃんは、保育園から帰ってくると出荷作業を進んで手伝ってくれる。「将来は私が(農場を)やる」と言ってくれるそう(左)

可能性を感じ、農業を決意

「これほど大きな投資をして大丈夫か」と感じる人もいるはずだ。私も出会う前はそう思っていた。平山亜美さん(二九歳)に会うのはこれで三回目だが、度胸と行動力に「この人はやり抜く」という思いが強くなっていく。

大学生生活を別府で送り、のんびりした環境が気に入った。大学卒業後、一度、出身地である関西に戻ったが、「別府の方が暮らしやすい」と再び移り住んだ。化粧品会社に勤務中、子どもを授かったが、育児と仕事の両立ができる環境ではなく、退職を決意した。「ゆっくりしながら、次の仕事を探そう」と情報収集をするうちに、国東半島で小ネギを生産する上原農園株式会社代表取締役の上原隆生さん(五四歳)たちと知り合った。「この地に、道の駅を造りたい」という上原さんたちの構想に亜美さんは賛同し、道の駅や農家レストランへの視察に同行した。そこで初めて農業を知った。「直売所を通じて消費者と交流したり、レストランのシェフと交流したりと農業にはいろんな形がある。マイナスイメージはなく、むしろ可能性の大きさを感じました」

次第に農業そのものへの関心が高まった。「道の駅ができて、年間通じて安定供給される農産物がなければ、人は来ない。生産がしっかりとしていなければ」——。いつしか、自ら農業で起業しようと考えてようになった。それからというもの、農業に関する本を読みあさった。活躍する女性農業者の情報も集め

た。

有機農業や六次産業化という切り口で活躍する女性農業者が多い中、亜美さんはあえて水耕栽培を選んだ。まず「年間安定して生産でき、収入が安定する作物」という経営面から候補に上がった。さらに「私は虫が大の苦手。クリーンな環境で、重い荷を持たない作物がいい」という理由から施設栽培に絞り込んだ。大分県で施設栽培の代表的な野菜といえばレタス、小ネギ、トマト。特に、小ネギは農園の主力作物で、近くで就農すれば生産、販売の両面で協力が得られる。しかし、「収穫した小ネギを入れるコンテナが重く、女性が生産したネギだと言っても特色を出しにくい」と判断。トマトは「食味が求められる作物は初心者には難しい」と選択肢から外した。残った品目がレタスだ。「レタスといえどサラダ。サラダは健康志向の女性向きの品目。同性として商品提案しやすいと思っただです」。さらに、宮崎県でスタッフに女性が多い水耕レタス法人を視察したことも強く影響した。幅広い年齢層の女性が長年働き続ける様子に、女性が輝けると確信した。

ひたむきさに支援者が続々

二〇一五年にウーマンメイクを設立。三〇〇〇平方メートルのハウス建設には、農林水産省の補助金を活用、さらに、経営者の能力や経営戦略を重点的に審査される事業性評価により、日本公庫から六〇〇〇万円の融資を受けた。補助金交付や融資決定の決め手は販路を

確保していたことだった。亜美さんは、上原農園の取引先である量販店に同行、営業の上、販売の確約を得ており、さらには上原農園が行う関東方面への小ネギ空輸にもレタスを同梱してもらえらることになっていた。

一六年七月から、本格的なレタス生産が始まった。施設内の設備を導入した企業の技術



役員、社員、パートを合わせて16人は全員女性。チーフマネージャーである後藤加奈さん(右)は4人の子どものママでもある

者から月に一度指導を受けている。経験豊富な上原さんからも都度、助言をもらう。それでも最初の二カ月は大変だったと言う。作業に必要なパートの人数が分からず、最小限の人数を雇用した。作業が滞ってくると必然的に亜美さんがカバーすることになる。創業と出産がほぼ同時期だった亜美さんは、娘の心

亜ちゃん(三歳)の面倒を見るために、実家から両親に来てもらうこともあった。早朝の出勤と夜の帰宅で「子どもの寝顔しか見られない日が続きました」

そんな亜美さんを周りは放っておかなかった。上原農園のスタッフ、レタスを集荷しに来た運送会社職員、建設中の出荷施設の工事関係者が荷物を運んでくれたり、レタスを買ってくれた。「多くの人を引き込むほど、とにかく頑張る。その分、負けん気も強いがね」と、上原さんは目を細める。

子連れ出勤にキッズルーム

亜美さんを含む三人の役員は皆、シングルマザーだ。「だからというわけではないのですが、子どもを食わせていかないといけないし」と亜美さん。この覚悟が少なからず影響しているのだろう。現在、二期目だが、一年目から黒字化を達成。二年目である今年度には計画を上回る売り上げを達成できそうだ。

ウーマンメイクは役員、パートを含む全員が女性。ほとんどのレタスには品種名でなく、女性らしいオリジナルの名前を付けている。中でも人気商品は『コサージュ・レタス』。リーフレタスが胸などに付ける花飾りに見えることから名付けた。「露地ものがほとんど出回っておらず、苦みがないので子どもから高齢者まで安定した人気があるだと思えます」農業であっても一般の会社のようにしたいという想いが亜美さんの心にある。日曜の休日、フレックスタイムの導入、シャワー

室の整備、子連れ出勤しても子どもたちを遊ばせられるキッズルームの設置はこうした想いを反映させたものだ。その上で、今後は農業により関心の高いスタッフの育成をしたいと考えている。「一日でもハウスの様子を見ないと異変が起こるので、観察力が重要で。育てることが大好きで、本人さえ構わなければ男性でも」と語る。

創業五年目(二〇二二年)の売り上げ目標は一億円。現在、年間一五〜二〇回というレタスの回転率をさらに上げること、そして複数の品種のレタスを組み合わせたり、カットしたりと加工度を上げていくことも検討中だ。「サラダのみならず、しゃぶしゃぶで食べるなどレタスの食べ方の提案もしていければ」と亜美さん。輸出にも想いを馳せる。「そこまですればカッコいいかなと思って(笑)」

農業に入るきっかけとなった道の駅構想。建設計画は未定だが、実現のためにこれからも活動していきたいと言う。「国東半島には野菜やかんきつなどいろんな作物があり、世界農業遺産に認定されたほど素敵な観光地でもあります。生産者がどんな想いで農産物を作っているのか、その背景を消費者に伝え、交流できる場所があればいい。私もお客さんと直接やりとりしながら販売したい」。二〇歳代とは思えないほど落ち着いた口調で語る姿が印象的だ。手を差し伸べる人々の期待に応えながら、決して寄り掛からない芯の強さを持っている。

(青山浩子／文、河野千年／撮影)



オーストラリアの国民的食品に「ベジマイト」がある。これは酵母エキスを主体としたペーストで、トーストに薄く塗って食べるものである。日本でもあまり見掛けなかった頃、やっと見つけた輸入食材店で「私たちに欠かせない味」と言ったところ、店のスタッフが「オーストラリアの方のソウルフードなんですね」と、にこやかにほほ笑みながら包んでくれた。

英語の「Soul Food」と言えば、本来アフリカ系アメリカ人の伝統料理のことだが、どうやら最近の日本ではふるさとを感じさせる食べ物を指すようだ。それでは日本生まれで、静岡県伊東市で幼少期を過ごし、五歳で初めて祖国の地を踏んだ私には、何がソウルフードになるのだろう。私の父は戦後初めての民間人として来日したオーストラリア人宣教師である。父は戦災者のために本国から粉ミルクなど食糧をたくさん持参したばかりか、ウール産業での復興を目指し、羊まで連れてきた。

結婚して初めて日本に渡り、そんな戦後の混乱の中で私を育てた母は、オレンジの代わりに橙でママレードを作るなど苦労したそうだが、納豆にも海苔にも抵抗のない私の舌はここで培われている。

オーストラリアでは、母の自慢料理の「ローステッドラムのミンストソース」や、NHKでも放映された「ダウントン・アビー」でご存じの方もあるであろう「アップルシャーロット」などが懐かしい味だ。

その後一八歳の時に父が他界してからは、母も大学で教鞭を執り、私もハーバード大学に入学して多忙な日々となった。そこでわが家では母と創作した、大量の野菜と肉で作る「コールドレイク・ミンスト」と「チキンシチュー」が時短料理の定番となり、大学の寮でもこれを交互に作って食いつないだ。これが私のアメリカ時代の思い出につながっている。

日本建築を専門とする私は日豪を往復した後、現在は日本で研究を続けているが、二〇一五年には明治時代に作られた徳川二代將軍秀忠の霊廟模型の一部を復元し公開した。昨春秋にはスペインでこれに関する講演をし、その際に招待された日本大使館の公邸で出された寿しにどれほどほっとしたことか。ソウルフードとは、実は「comfort food」（安らぎを感じさせる食べ物）なのではと、この時実感した。そして、それは思い出の数だけ存在することも。



ウィリアム・コールドレイク
1952年日本生まれ。ハーバード大学客員教授、メルボルン大学日本学初代主任教授歴任後、現在、現職および工学系研究科建築学専攻客員研究員を兼務。1910年日英博覧会以降、行方不明となっていた台徳院（徳川秀忠）霊廟の大型建築模型の発見をきっかけに、英国ロイヤル・コレクション・トラスト代表として模型の修復プロジェクトをコーディネートし、2015年4月に徳川家菩提寺である増上寺で日本初の展示を実現した。同年エリザベス2世女王陛下よりその貢献を認められロイヤル・ヴィクトリア勲章を授与された。主な著書に、『Architecture and Authority in Japan』（1996年、Routledge）、『台徳院殿霊廟模型ガイドブック』（2017年、増上寺）など。

東京大学大学院情報学環 特任教授
William H. Coaldrake

ソウルフードの風景

LIENS株式会社
アグリカルチャー部長

亀山 初美

(五三歳)



●かめやま はつみ●
一九六五年京都府生まれ。二〇〇六年個人事業として起業する。〇七年丸亀市産学官連携事業を皮切りに、キャリア・コンサルティング、かがわ産業支援財団農商工連携コーディネーター、六次産業化プランナー、香川県六次産業化サポートセンター委託、中小企業庁ちいさな企業未来会議コメンターなどを経験。現在、六次産業化中央サポートセンタープランナー、愛媛県松山商工会議所農商工連携研究会コーディネーターなど企業のアドバイザーを務める。

「六次産業化」は手段であって、目標や目的ではないと、私は思う。

私の仕事は現在、六次産業化プランナー、ビジネスアドバイザーとして、一次産業の農業者の、また二次、三次の関係企業に対してのコンサルティングやコーディネート、キャリア指導など多岐にわたる。中でも年間の三分の二は、六次産業化プランナーとして全国の一次産業者のところへ伺い、さまざまな相談を受けている。この業界に足を踏み入れたきっかけは農業者の仲間がいたからだ。その人たちの影響もあり、今でも日々、農業経営の現場で勉強させてもらいながら状況把握を行い、年間何百という数の人たちと関わり仕事をしている。

その中で感じるのは、六次産業化は目的だ、最終ゴールだと思っている人が実に多いということだ。六次産業化が農業という一次産業主導の新しいビジネスモデルになる、と話題になった当初は、六次産業化を行えばその先にはバラ色の人生が待っているという

風潮が何となくあった。事業計画が順調に進み、売り上げが伸びればおのずと道は開けると思っていた関係者も多かった。そのため、六次産業化をすることが目標や目的になってしまったのだと私は思っている。

しかし、現実問題として「六次産業化法」が施行されてから七年を経過し、現時点で六次産業化を実践し成功を収め、規模拡大、雇用を創出し、所得向上できた人がいったい何人いるのだろうか？そこにバラ色の人生があつたのだろうか？事業終了した人たちが出てきているが、成功と言えるところまでいっている人は少ない。それはどうしてなのか？

その要因の一つは、自分はなぜ二次産業に携わっているのか、どのような夢を実現したいのか、といった自己の状況判断や分析などが客観的にできていなかったことではないかと考える。

そこで申し上げたい。まず、自身の目的を達成するための事業計画をしっかりとして自身で作る、それを実現するために六次産業化を一つの手段として活用する。

個々の事業者が己を見つめ積極的に参画していれば、おのずと自分の経営状態を把握し、いやが応でも自己の状況を経営数字という客観的なデータによって自覚することになる。その見極めによって自身の体力、技術力、経済力などが明確に見えてくるのである。

その上で今、何をなすべきなのかを決めた方がよい。計画通りに進まなかった人の多くは、六次産業化の補助金が出るからという理由だけで自身の現状も把握せず、その補助事業の内容に合わせただけの事業計画でスタートしたのではないだろうか？

私が関わった事業が全て成功しているとは思っていないが、寝る間も惜しんで事業計画を立てた時間や身に付いたスキルというものは、その後も事業に活かされ決して無駄にはなっていないと、必死で取り組んだ人たちの経営の今を見て努力が成功につながっていると感じる。

も う一つのポイントとしては、一次産業は年に一作が当たり前という現状をもとに、PDCA (Plan「計画」→Do「実行」→Check「評価」→Act「改善」)サイクルをうまく回すことだ。単年度で結果が出る即効性のある策などはあまりなく、三年、五年でも

結果が出ないことさえある。そのことを関係者は十分理解すべきである。継続の中にこそヒントはある。

いま一度、再確認してほしい。六次産業化法には「地域資源を活用した農林漁業者等による新事業の創出等に関する施策及び地域の農林水産物の利用の促進に関する施策を総合的に推進することにより、農林漁業等の振興等を図るとともに、食料自給率の向上等に寄与すること」とある。法の目的は農林漁業の振興であり、その目標の一つに所得向上が挙げられる。所得向上することで担い手創出、雇用創出にもつながる。また、規模拡大や企業化も図っていくようになる。この目標・目的を達成するための手段の一つが六次産業化である。六次産業化を行うことで、足元を見詰め直すことができ、次の一手が出せるようになる。その積み重ねが、所得向上につながっていくと思う。

最も効率的な体質改善を行い、自身の強みを武器に経営拡大、良質経営ができるか？ 昨今の気候の急激な変動にどう対応すべきか？ まだまだ課題山積みである一次産業。だからこそやりがいい山ほどある、と思う。私なりに今後、農業経営現場の仲間と共に課題解決に向けてのお手伝いを行うつもりでいる。

F

一次産業は単年期待の即効性でなく 六次産業化も手段であり目的でない

ヒツジに挑んだ秩父の営農者たち

畜産碑めぐり (17) 埼玉緬羊発祥之地

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー

加茂 幹男

〔西〕 秩父線の西秩父駅（埼玉県秩父市）から南東に約八〇〇メートル、広大な羊山公園の南西隅、羊山センター近くに「埼玉緬羊発祥之地」と刻まれた大きな石碑が建てられています。この碑は、一九四八年に埼玉県の緬羊協会が建立しました。

石碑には、「大正の中頃より農業経営の衰退著しく国家は挙げて対策に苦慮せり 吾等同志は有畜多角経営に非らずんばこの難局を打開し得ずと痛感し飼育の最も簡易にして多量の肥料と衣料及び食糧を得る緬羊飼育を日夜農家に力説せり それ

が急速なる発展は県緬羊種畜場の新設に依るを最善なりと信じ昭和九年三月秩父郡下町村長郡農会各種団体並に飼育者一同連署を以つて当局に陳情書を提出せり 当局に在りては

其の重要性を認むると共に郡下各町村特に秩父町及び飼育者同志の絶大なる努力と協力を得て同年十月此の地を選び埼玉県立種畜場秩父分場の開設を見た：以下中略：永遠に記念すると共に将来緬羊飼育発展に伴い農村興隆の資に供せんとす」と記載されています。

日本のヒツジは、明治以前に大陸からの献上物として海を越えてきたことがいくつかの古書に記載されていますが、家畜としてのヒツジは存在しなかったと言われています。

明治政府が畜産を奨励したことで、明治初年、羊毛を目的にアメリカから輸入したのを最初に、六〇〇〇頭のヒツジが導入され、一八七五年に大久保利通によって千葉県の下総に牧羊場が新設されました。

〔こ〕 れが日本での本格的なヒツジの飼育の始まりです。羊毛は防寒用の軍服に用いられたことから、第一次世界大戦中の大正期および昭和に入ってから国策としてヒツジの飼育が奨励されました。ヒツジの飼養頭数は第



「埼玉緬羊発祥之地」碑（秩父市役所都市計画課千鳥良太氏提供）

二次世界大戦直前に一九万頭、一九五七年には九十四万頭まで増加しましたが、輸入羊毛との価格競争に負け、七五年には一万二〇〇〇頭にまで激減しました。

二〇〇四年には一万頭を切りましたが、〇六年以降、ジンギスカンブームでダイエット効果がある健康な食肉などが見直され、一三年には一万六〇〇〇頭に増加し、約半数が北海道で飼育されています。しかし、ヒツジの枝肉生産量は一八〇ト程度です。これは日本の羊肉消費量全体で見ると約一％で、多くはオーストラリアやニュージーランドからの輸入です。

公園に冠された「羊山」の名は、碑文のように戦前に県の緬羊種畜場が設けられていたことによるもので、芝桜の丘の西に「ふれあい牧場」があり、多くのヒツジが飼われています。

F



Profile

かも みきお
1950年北海道生まれ。岩手大学農業機械学科卒業後、農林省東北農業試験場入省。農林水産技術会議事務局、(独)農研機構近畿中国四国農業研究センター四国農業研究監、(独)農研機構畜産草地研究所草地研究監などを経て、2010年から日本政策金融公庫に勤務。専門は畜産草地で、主な研究対象は飼料の収穫・調製・給与など。



滞在型市民農園クラインガルテン 地域住民が交流する田舎親戚制度

長野県松本市
四賀むらづくり株式会社 代表取締役 金井 保志



二七年前に四賀村長が提唱

「こんにちは。今、来ましたよ！」と車の助手席から道端の畑にいた私に声を掛けてくれたのは横浜のYさん。私も元気に「こんにちは！よく早く着いたねえ」と返事を返すと、すかさず「今朝は五時に家を出てきたからね。買ってきたキャベツの苗を早く植えようと思ってる」と満面の笑みで答えてくれ、運転席のご主人もニコニコ顔です。

このように胸をわくわくさせながらガルテナーさん（利用者）が次から次へと四賀クラインガルテンを目指しやってきました。そして、地域住民といたる所でこうした会話が飛び交います。

豊かな自然に囲まれていた長野県松本市四賀地区は、資源循環型社会の構築に取り組んでおり、有機無農薬栽培、緑豊かな美しい景観づくり、そして都市と田舎との活気ある交流を実践しています。一九九一年当時の四賀村長の「新しい農業の在り方は、遊休荒廃農地を増やさないために寝た

きり老人でもできる貸地による農業なのだ！」という信念と強いリーダーシップにより誕生した、農業を中心に都市と田舎との活気ある交流をお話ししましょう。

クラインガルテンとはドイツ語で「小さな庭」ですが、日本では主に滞在型市民農園のことを指します。滞在型というのは一般の市民農園と違い、ラウベ（滞在小屋）が付いているためです。四賀地区にはラウベ五三三画の坊主山クラインガルテンと七八区画の緑ヶ丘クラインガルテンの二カ所があります。

四賀クラインガルテンではガルテナーに共通の条件を付してあります。①作物は必ず有機無農薬農法で行う、②リサイクルできないゴミは全て持ち帰る、③地域の伝統行事には積極的に参加する、④日用品や食材は基本的に四賀地区内で調達する、⑤一カ月に三泊四日もしくは六日間を利用すること、です。①と②は、資源循環型社会の構築に、③と④は地区を一緒に盛り上げていってもら

いたいと気持ちから、そして⑤は農園の手入れのための最低限必要な日数だと考え決めました。この条件に対するガルテナーからの不満は一切ありません。

有機農法で作物を生産

資源循環型社会を構築する上で環境整備が伴います。四賀地区ではガルテナーはもちろん一般農家においても水稲から小麦、ソバ、野菜、果樹に至るまで有機たい肥を使用した栽培が盛んな地です。そこで、畑をはじめラウベ周囲の芝生の中に生える雑草や台所の野菜くずがゴミとなりまですので、こうしたものはガルテナー自身が肥料化して区画内で施用するように指導しています。

さらに地区には養鶏農家が数軒あり、行政主導でそこから出る鶏ふんを有機センターに一括集めて肥料化しています。完成された有機肥料は「福寿有機」という名前で長野県内のあちこちで販売されて人気があります。

profile

金井 保志 かない やすし

1946年長野県東筑摩郡四賀村(現在、松本市)生まれ(71歳)。地元の高校を卒業後、6年間名古屋市の民間企業に勤務後、帰郷して旧四賀村役場に勤務する。2005年、農業を営むかたわら四賀むらづくり(株)執行役員を経て代表取締役役に就任。同年4月からは四賀地区町会連合会長を4年間務め、地域づくりの基礎をなした。趣味はバイクとカラオケで、ビールをよくたしなむ。

四賀むらづくり株式会社

1993年に坊主山クラインガルテンの供用開始があり、年次毎に区画が増えてきた95年10月にクラインガルテン施設管理のために第三セクターとして設立。以後、その他公共施設管理や環境整備を手掛け、2004年からは宿泊部門で穴沢温泉松茸山荘の経営を担う。社内に松本市四賀観光協会の事務局を置き、「福寿草まつり」も企画運営をしている。

前述の通り、四賀クラインガルテンは有機農法が必須ですので、毎年、全ガルテナーに「福寿有機」三〇トル入りを一〇袋ずつ配布しています。ガルテナーさんの愛情と福寿有機によって育った作物は、信州特有の朝晩の寒暖差も相まって甘くてとてもおいしい。あるガルテナーさんは、「トマト嫌いの孫がここでできたトマトだけは食べてくれる」と喜んで話してくれました。

さて、クラインガルテンでガルテナーがどのような楽しみ方をするのか少しお話ししましょう。緑ヶ丘のガルテナーさんはラウベに到着するとまず薪ストーブの火をおこして湯を沸かしたり調理をしたりと重宝に使っています。比較的平坦で陽光そそぐ坊主山のガルテナーさんはラウベに荷物を入れると畑の様子を見回りますが、春



上：年3回行われる「土づくり講習会」で熱心に学ぶガルテナー
下：薪ストーブ煙突が特徴の緑ヶ丘のラウベ群

から秋の間はすぐに草取りから始めます。雨降りの後三日もすれば雑草だらけで、野菜がどこにあるか区別がつかない状態になりますから、一カ月に三泊四日もしくは六日以上の利用のゆえんはここにあります。

四賀むらづくりでは、四賀の里での時間をより楽しんでもらおうと近隣の観光地や地域イベントを掲載した「クラインガルテンだより」を作成しています。

ガルテナーの中には、地域に移住を希望される方も多いです。現在までに、八人の方が移住してくれました。「むらづくり」を会社名に掲げる私たちは、無償で仲介をします。しかしながら、「不在にしても想い入れのあるわが家」と考える人が多いために空き家はあるけれども、なかなか移

住していただくことが難しいのが現状です。

田舎の親戚制度でバックアップ

畑作業や田舎暮らし初心者でも気軽に利用するためにも地域住民との交流が欠かせないと考え、四賀クラインガルテンでは独自のバックアップ体制を整えています。

代表的なのが「田舎の親戚制度」です。地域住民が「田舎の親戚」というボランティアをして活動に参加しています。これは、各区画のガルテナーと市民とで肩の凝らない親戚関係を結んでもらい、積極的に交流したり、ガルテナーの畑作業の協力などをするものです。付き合ひ方は当事者同士に任せていますが、冠婚葬祭にも参加し合う「親戚」も見られます。地域住民には、都会の人

たちとの親戚付き合い希望者を募りますが、多くがなりたいたいと希望して抽選になるほどです。

またガルテナーの中には柿やりんご、ブドウなどを植樹して立派な果実にして食す人や色々な花木を観賞する人たちもいて、そうした木々が年々成長してくると必然的に剪定せんていに困難を来します。この場合、四賀むらづくりの社員がシルバードとして有償で剪定作業を請け負います。

さらに、地域住民とガルテナーが交流できるような毎年「開園祭」「夕涼み会」「収穫祭」を開催しています。当初は事務局主導型でガルテナーは客として参加するような形式でしたが徐々に参加率が低下してきました。これはどうしたものかと思案した結果、参加者が自ら企画運営すれば必ずや面白味と参加率を上げることができると考えたのです。そして、五年前よりガルテナー参画型イベントに変更していきましました。一三〇区画をランダムに三班に分けて三天イベントの企画から各班が交互に受け持つ形です。考えは的中し、今では、各イベントに応じ日本蕎麦の食べ処や喫茶コーナー、巨大たまご焼きコーナー、豚汁や芋煮処、松茸争奪ビンゴゲームなど多彩な催しに発展しています。

実は、都市に住むガルテナーは生まれ故郷が北は青森県から南は鹿児島県まで広い範囲になりますので、役割の中で芋煮やけんちん汁があると、それぞれのお国柄の味付けや幼いころのおふくろの味ともいえる想いが一挙に出て、班長のまとも一苦勞あるようです。年数を重ねるごとにガルテナー同士の建設的な競争もできて、イベントはにぎわいの基になりました。これらはガルテナー

同士の交流にも一役をかうことになりました。

創設までには高いカベ

このように、大変なにぎわいを見せる四賀クラインガルテンですが、創設までには高いカベがありました。

一九九一年当時、「四賀村」だった四賀地区は、大都市である松本市に隣接し交通の便もそれほど悪くはなかったのですが、これといった観光資源もなく、かつて農業の主軸であった養蚕業の衰退で荒廃桑園が多く残っている状態で活気があるとはお世辞にも言えない状態でした。

この時期に村長に就任した中島学さんは、五三年頃から欧州各地を酪農視察に訪れていた折に見かけた小さな庭づくりが脳裏を離れず「日本も近いうちにゆとり生活を望む人が増える」と考え、新しい農業経営の在り方と都市の交流事業を組み合わせた日本的な市民農園を模索し「田舎暮らし」に着目、滞在型クラインガルテンの創設を長野県の窓口申し込んだのです。

その頃、日本では市民農園が余り知られておらず、当局は「観光事業だからその企画には乗れない」と当初冷たかったといいますが、彼の熱意にとうとう承認。ところが、村長本人も予想だにできなかったことでしょう、今度は村長支持者から「大事な税金を何で都会の人向けに使わなくちゃいけないんだ」と喧々囂々けんけんごうごうとなり、さらに村議会に発展しました。「市民農園創設議案」は収束に向かうまでに一年余りの時間を要しました。結果、村議会で「クラインガルテン創設はうまくいく筈

がないから、これを承認しても事業に失敗すれば、村長は退任せざるを得ないだろう」と結論し、承認となりました。今では笑い話ですが真剣に創設反対論議をしたものです。

ガルテナーがにぎわい発信

しかしながら、事業に着手してみると、当初から行政視察がひっきりなしに押し寄せ、今では全国に八〇カ所以上のクラインガルテンを見るに至ったのです。地区住民は皆びっくり！創設反対から転じて住民の誇りに変わりました。

私たち住民はお金持ちの気位の高い都市住民が来て農作業着姿の自分たちを笑うんじゃないかなどと、疑心暗鬼になっていたような気がします。でも、そんなことは全くなかった。むしろ、ガルテナーから田舎のしがらみを取り払うような新しい考え方や発想を住民にもたらしてくれました。

四賀クラインガルテンのガルテナーの共通点はアルプス登山の経験があることです。アルプスを眺められるこの地が気に入って、「空気と水がおいしい」「原風景とどめる静かな山間が何とも情緒を醸し出している」と言います。

田舎の親戚である地域住民を募ってくれ、資源循環型社会を目指す地区の施策を理解しクラインガルテンの農園以外にも積極的に地区の耕作放棄地を解消してくれる。地域と地域住民の魅力もガルテナーの実践から全国に発信されています。にぎわいの創生をガルテナーさん自らが発して、地域活性化の一役を担ってくれているのを感じています。

『食べるってどんなこと?』

あなたと考えたい命のつながりあい』

古沢 広祐 著



(平凡社・1,400円 税抜)

普段は意識しない命のつながり

宇根 豊

(百姓・思想家)

古沢先生は懸命に教えようとしている。それに
対して、子どもたち(中学生)は突っ込みを入れる。
「それって、ひどすぎるんじゃない?」「信じられな
い!」「話が難しくなってるじゃない?」「私なんかは、もっ
と突っ込め!」と子どもたちを応援しながら読ん
だが、古沢先生は冷静に話をすすめる。案外この
問答が楽しかった。

私も知らないことがいっぱいあった。三つだけ
紹介しよう。食事のときに「いただきます」と言う
のは、戦前からの道徳教育によって普及したとい
うのは初耳だった。

世界で生産されている米、小麦、トウモロコシ
のうち、バイオ燃料用の二割を引いて、世界中の
人に平等に分配すると一人あたり二四〇キログラ
ムになる。ところが日本人は三七〇キログラムを食
べているそうだ(肉類も餌になった量を計算して

いる)。しかし、誰も食べ過ぎだという実感が
ない。これは「鈍感じゃない?」と言われそう
だ。

近年の食料危機は、投機マネーが食料相場に流
れ込んで、穀物価格の上昇を招いていることが原
因である。金融市場の規模は一二七〇〇兆円であ
るのに対して、シカゴ穀物先物市場はたった数兆
円の規模でしかないのだから、ちょっとした資金
の流れで大きな影響が出るはずだ。私たちはこ
ういう社会を望んだのではないが、責任はある。

この本は食べものの実状を伝えながら、食べる
ことを考えさせる本だ。本のサブタイトルは「あ
なたと考えたい命のつながりあい」である。私が
考えに沈んだのは、次のような箇所であった。

「私たちの身体は食べることを通して、生さ
ものとそして大地・自然とつながっている」ま
ったく同感だ。しかし、子どもたちはこのことを実感し
ていないだろうか。たとえば卵を産むのは雌鶏だが、
一緒に産まれた雄のヒナは全部殺されていること
を古沢先生はちゃんと伝えてくれている。そも
そも、人間に食べられるために、生まれてくる卵
って何だろうか。私も百姓として、鶏を飼育
しているが、こんなことを考えたことはな
かった。

私たちは考えなくていい生活・人生に浸
りすぎている。そのことを一つずつ丁寧に古
沢先生は語り、命は生き生きと優しく、そ
して辛く悲しくつながっているのだ。いつ
の間にか、現代社会は大きく転換してしま
ったのに、私たちは変化の正体を考え、感
じることを怠ってきた。そのことに気づか
せてくれる本だった。

読まれてます 三省堂書店農林水産省売店 (2018年1月1日~1月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 いま蘇る柳田國男の農政改革	山下 一仁/著	新潮社	1,600円
2 農学が世界を救う! 食料・生命・環境をめぐる科学の挑戦	生源寺 真一、太田 寛行、 安田 弘法/編著	岩波書店	820円
3 図解 知識ゼロからの現代漁業入門	濱田 武士/監修	家の光協会	1,600円
4 農文協ブックレット 種子法廃止でどうなる?	農文協/編	農山漁村文化協会	900円
5 林ヲ営ム 木の価値を高める技術と経営	赤堀 楠雄/著	農山漁村文化協会	2,000円
6 小さい林業で稼ぐコツ 軽トラとチェーンソーがあればできる	農文協/編	農山漁村文化協会	2,000円
7 農業のマーケティング教科書 食と農のおいしいつなぎかた	岩崎 邦彦/著	日本経済新聞出版社	1,600円
8 事例でわかる漁業法と漁業権の課題	小松 正之、有蘭 真琴/著	成山堂書店	3,800円
9 亡国の漁業権開放 協同組合と資源・地域・国境の崩壊	鈴木 宣弘/著	筑波書房	750円
10 種子が消えれば、あなたも消える 共有か独占か	西川 芳昭/著	コモンズ	1,800円

認定農業者の皆さまへ

自主性と創意工夫を活かした 経営改善を応援します

経営改善に取り組む認定農業者の皆さまのさまざまなニーズにお応えします。

■スーパーL資金（農業経営基盤強化資金）

ご利用いただける方	認定農業者（農業経営改善計画を作成して市町村長の認定を受けた個人・法人） ※なお、個人の場合、簿記記帳を行っていること、または今後簿記記帳を行うことが条件となります。
資金の使いみち	農業経営改善計画の達成に必要な次の資金 ただし、経営改善資金計画を作成し、市町村を事務局とする特別融資制度推進会議の認定を受けた事業に限ります。
	農地など 取得のほか、改良・造成も対象となります。
	施設・機械 農産物の処理加工施設、店舗などの流通販売施設も対象となります。
	果樹・家畜など 購入費、新植・改植費用のほか、育成費も対象となります。
	その他の経営費 規模拡大や設備投資などに伴って必要となる原材料費、人件費などが対象となります。
	経営の安定化 負債の整理（制度資金は除く）などが対象となります。
法人への出資金 個人が法人に参加するために必要な出資金などの支払いが対象となります。	
ご融資条件	融資金限度額 【個人】 3億円（特認6億円） 【法人】 10億円（特認20億円） ※このうち経営の安定化のための資金のご融資金限度額は個人6,000万円（特認1億2,000万円）、法人2億円（特認4億円）です。
	ご返済期間 25年以内（うち据置期間10年以内）
	利率（年） 期間により異なる利率が適用されます。詳しくはお問い合わせください。
	担保・保証人 ご相談の上、決めさせていただきます。
ご留意いただきたい事項	1. 審査の結果により、ご希望に沿えない場合がございます。 2. 上記以外にも資金をご利用いただくための要件などがございます。 詳しくは、事業資金相談ダイヤル（0120-154-505）または最寄りの日本政策金融公庫支店（農林水産事業）までお問い合わせください。

意見交換会

畜産経営の環境や
課題に活発な意見

奈良県内で初となる「畜産経営者意見交換会」が開催され、県内の畜産経営者一〇人、関係機関として近畿農政局県拠点、県畜産課などの担当者が参加。現状の畜産経営を取り巻く環境や課題について、情報交換を行いました。

経営者からは「家畜排せつ物の集中処理システムの導入を検討してほしい」「畜産経営をするための用地が確保しづらい」などの意見が出され、関係機関からは畜産GAPや県内畜産団地構想などの情報提供が行われました。一月一〇日、於：奈良市、参加者：公庫のお客さまや関係機関など二〇人（奈良支店）



畜産経営者から現在の課題が語られた意見交換会

交流会

テーマ別の分科会が
参加者にも好評

お客さまである農業者と、食品企業の相互交流を目的とした交流会を開催しました。

今回は「集落営農法人」と「新規就農者」をテーマに分科会を設け、株式会社ナカセ農園代表取締役の中瀬進吾氏による講演の後、意見交換を行いました。さらに、関係機関の皆さまにも登壇いただく全体会議を行いました。

懇親会では「分科会では少人数グループをつくり、より深い議論ができた」などの感想が寄せられました。二月二四日、於：福井市、参加者：公庫のお客さまなど四八人（福井支店）



中瀬氏による新規就農者分科会の講演

フォーラム

よなよなエールの
組織変革に学ぶ

「ぐんま農と食の経営者フォーラム」が開催され、株式会社ヤッホーブルーイング代表取締役社長の井手直行氏が「よなよなエール流差別化戦略」をテーマに講演をしました。

井手氏は「差別化は他社が躊躇（ちゅうちゅう）するくらい行う」「消費者はありふれた製品、サービスに飽きている」など、独自戦略の重要性を力説しました。

参加者からは「得意分野を伸ばすことの大切さが分かった」などの感想が寄せられました。二月二九日、於：前橋市、参加者：公庫のお客さまなど二〇一人（前橋支店）



チームビルディングプログラムにより組織変革を果たした井手氏の講演会

交流会

農産物物流の
講演会が盛況

二回目の「農林水産事業交流会」を開催。講演会では、株式会社農業総合研究所代表取締役の及川智正氏が「ビジネスとして魅力ある農産業の確立」をテーマに、農産物の物流に関するビジネスモデルと今後の取り組みについて語りました。

参加者からは「先進的な取り組みが勉強になった」「背中を押されるヒントがあった」「今までの講演会で一番感動とインパクトがあった」など、「大変参考になった」との回答が九割を超え、及川氏も交えた意見交換会も盛況でした。一月三〇日、於：大分市、参加者：ご融資先や関係機関など二〇〇人超（大分支店）



講演後、参加者からの質問に答える及川氏

◆一月号特集「農業ニューウェイブ時代」の、柏木智帆さんの「顧客獲得にクラウドファンディングも」を興味をもって拝読しました。

農業といえは、昔ながらの方法で生産・販売を行うのが一般的でしたが、インターネットの時代到来で、それを活用した若い世代らしいクラウドファンディングを、実行された「井上農場」に拍手を送りたいと思います。インターネットを最大限活用して個人客ががちりつつかんで売り上げを伸ばしているところが現代的です。情報化社会の中、雑誌などを見た個人からインターネット経由での問い合わせが増え、農業生産者は「お取り寄せ」など直接取引で販路を拡大しています。

農業従事者が今までの慣習にとられない取り組みをすれば、新しい農業形態が可能となるでしょう。ぜひ、挑戦者が増えることを期待します。(広島県広島市 巨幸男)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただくことがあります。掲載者には、薄謝を呈呈します。

「郵送およびFAX先」
〒〇〇〇〇〇〇四
東京都千代田区大手町一九一四
大手町フィナンシャルシティノースタワー
日本政策金融公庫 農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX 〇三三三七〇一三五〇

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査(農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など)結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する『AFCフォーラム』『アグリ・フードサポート』のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(https://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。(情報企画部)

編集後記

④ 同一商品の生産者が多く、見た目などの差別化が工業製品のように容易でない農産物の場合、産地の要素が重要です。具体的には気候、風土、歴史的背景の特性といったものをいかに差別化に結び付けるか。生産者個々では限界があります。地域、あるいは国レベルの連携で強固なブランドを築けるか、今回その意義を考えました。(嶋貫)

④ 座談会、交流会出席のため帯広を初訪問。広大な農地に触れ十勝の農畜産物を使った料理をいただくなど、十勝を体感しては感動しきりでした。座談会では、農家さんたちが強い団結力を持って地域を持ち上げようと取り組まれていることに感心しました。特集誌面から、その様子とパワーを感じていただけましたでしょうか。(城間)

④ 秋の運動会の朝、母はいつも海苔巻きを作ってくれました。朝は、その端っこを頬張り登校したものです。昼にはお重にきれいに並べられた海苔巻きを家族と一緒に校庭で食べました。そこには、青くて酸っぱいミカンも。慌ただしく過ごす毎日、コールドレイク先生のエッセイが思い出させてくれました。皆さまの安らぎを感じる食べ物は何？(小形)

④ 埼玉・秩父は祖父の出身地ということもあり、子どもの頃からよく遊びに行っていました。羊山公園も何度も訪れているのに、綿羊発祥の碑があったとは！今号の「耳よりな話」字数の都合で碑文を一部割愛していますが、全文を読むと当時の営農者の方々のヒジに懸ける熱い想いが伝わってきます。芝桜の季節、ぜひこの碑も探してみてください。(前島)

AFCフォーラム Forum

編集

嶋谷 元 嶋貫 伸二 清村 真仁
柴崎 勇太 城間 綾子 小形 正枝
前島 幸子

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>

印刷 凸版印刷株式会社

販売

株式会社日本食糧新聞社
〒105-0003 東京都港区西新橋2-21-2
第一南桜ビル
Tel. 03(3432)2927
Fax. 03(3578)9432
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

■定価 514円(税込)

④ご意見、ご提案をお待ちしております。

④巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり 農と食 をつなぎます。



第13回 アグリフードEXPO 東京 2018

—— プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会 ——

日時

8月22^水日 / 23^木日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催

日本政策金融公庫

会場

東京ビッグサイト 東4ホール



1を100に変えた連携力



『おじいちゃんのいちご』花井 彩葉 栃木県宇都宮市立横川西小学校

■ AFCフォーラム 平成30年3月1日発行(毎月1回1日発行)第65巻12号(811号)
 ■ 発行／(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■ 販売／株式会社日本経済新聞社 〒105-0003 東京都港区国新橋2-1-2 第一南楼7F Tel.03(3432)2927 ■ 定価514円(本体価格476円)

